住友商事×アビームコンサルティング 両社の強みを基にモビリティの未来を描く

自動運転の競争軸は、技術開発にとどまらず、法制度、社会受容性、事業モデルを含む社会実装へと広がっている。その全体像を捉えるには、車両技術に加え、EV・SDV、フィジカルAI、米中のAI覇権競争までを俯瞰する視点が欠かせない。住商アビーム自動車総合研究所（以下、住商アビーム）は、住友商事のグローバルな事業ネットワークと、アビームコンサルティングの分析・提案力を融合。世界各地で得る一次情報を基に、自動運転の事業化と社会実装を支援している。

実用化フェーズに入るL2++・L4 日本は技術以外の社会実装が課題

2025年の自動運転市場は世界で約500億ドル、2029年には約1140億ドルへ成長すると見られる※。背景には、ドライバー不足の補完や移動弱者支援、物流効率化への期待がある。米中では、自家用車向けの高度運転支援「L（レベル）2++」と、ロボタクシーなど無人公共交通を担う「L（レベル）4」の実用化が進む。

レベル2++は、運転者が前方監視を続け、必要時に直ちに操作を引き継ぐことを前提に、市街地での右左折や車線変更から目的地での駐車まで、ほぼ一連の運転操作を車両が担う。

対してレベル4は、特定の走行環境条件下でシステムが全運転操作を担う。責任主体が異なるため、両者を機能の高度さだけで混同してはならない。

日本ではレベル4の実証運行とレベル2++の開発が進むが、本格商用化は米中に後れる。追い付くには、技術や走行データに加え、事故責任を含む法制度、社会的受容性、持続可能な事業の座組みが不可欠だ。

自動運転は、OEM、交通事業者、自治体、通信、保険などが連携し、社会実装を支える巨大なエコシステムである。

図1　各国でのモビリティ先進企業の取り組みを調査



自動運転領域で先行する米国・中国など、海外各国・各都市の取り組み事例を実地調査し、最新のサービス運用実態や技術動向の知見を把握・蓄積している

商社の現場力とコンサル力を融合 一次情報に基づく社会実装支援

こうした自動運転・ADASの社会実装に向け、各プレーヤーに調査・研究・コンサルティングサービスを提供するのが住商アビームである。

同社は、総合商社の住友商事とグローバルコンサルティングファームのアビームコンサルティングが2003年に設立した合弁会社で、自動車・モビリティ分野に特化する。自動車メーカー、部品サプライヤー、モビリティ事業者、自治体、官公庁などに対し、市場の見極めから事業戦略の策定、社会実装まで支援している。

住友商事は長年、自動車産業の上流から下流まで事業を展開し、世界各地に幅広いネットワークを築いてきた。住商アビームは、この事業基盤とアビームコンサルティングの分析・提案力を融合。公開情報の整理にとどまらず、現地事業者や有識者へのヒアリング、サービスの実地確認を通じ、現場でなければ得られない一次情報を収集・分析できる点を強みとする。

カバー領域は、自動運転、モビリティデータ連携、交通安全、ロボティクスなど多岐にわたる。特に、商社ネットワークを生かし、中国・インド・韓国・ベトナムをはじめとする海外OEM、アジアの財閥関連のサプライチェーンを含む海外自動車市場に精通している。

社会課題や市場動向の検証から、事業化に向けたビジネスモデルの立案、施策・政策の設計、システム開発・実装まで一貫して支援する。

自動運転分野では、米国サンフランシスコ、オースティン、ラスベガス、中国の上海・北京・深圳、シンガポールなどを継続的に訪問。Waymo、Tesla、Avride、Zoox、Pony AI、WeRideなどのサービスを実際に利用、関係者をヒアリングするなど、運行実態や技術動向を確認することで、市場性と事業性を検証している（図1）。理論先行ではなく、商社ならではの現場に根差した調査である。

※ 令和7年版情報通信白書、総務省

図2　自動運転を取り巻く周辺領域



自動運転を単独領域ではなく、フィジカルAI、EV・SDV、米中AI覇権競争との関係から複眼的に捉え、技術・事業環境の変化を調査する

自動運転を周辺領域から捉える フィジカルAIまで含む複眼的な調査

自動運転を、それだけで完結する技術やビジネスとして捉えると、産業の全体像を見誤りかねない。自動運転は、AIが現実世界を認識し行動するフィジカルAIの主要領域であり、ヒューマノイドロボットなどと基盤モデル、半導体、センサー、データを共有する。その土台となるEVやSDVの進展、AI覇権を巡る米中競争とも不可分であり、周辺領域を含む複眼的な分析が必要となる。

住商アビームは、世界各地の主要モーターショーやCESなどを視察し、自動運転、EV・SDV、フィジカルAIの技術と事業環境を継続的に調査している（図2）。

社会的受容性の研究にも取り組む。筑波大学が主導する「『クルマ』と『自動化するクルマ』の社会的受容の包括的理解に向けた学際研究」では、住商アビームの研究者が研究協力者として参画。米国・中国・欧州の自動運転タクシー、バス、トラックの先進事例と事業性、国内外の法令や社会受容性を分析し、制度設計とルール形成に知見を提供している。

このように、住商アビームは、総合商社の現場力とコンサルティングファームの分析・提案力を生かし、自動運転を取り巻く技術、事業、制度、社会を一体で捉えている。今後もスマートモビリティの発展と社会価値の創出に貢献していく構えだ。

講演概要

「走るロボット」と「歩くクルマ」
――フィジカルAIをめぐる米中覇権競争



生成AIに次ぐ競争領域は、AIが物理世界を認識し、行動するフィジカルAIであり、自動運転はその最前線にある。本講演では、基盤モデルと半導体設計で先行する米国に、製造装置・材料で供給網の要衝を占める日本が連なる同盟陣営と、ハードウエアのコスト優位性と実走行データの規模で追い上げる中国との覇権競争を構造的に解説。産業構造の転換と、日本企業が受ける影響を考察する。

株式会社住商アビーム自動車総合研究所　アソシエイト・プリンシパル　**朴 宰徹（パク・ジェーチョル）氏**

お問い合わせ

SC-ABeam Automotive Consulting

株式会社住商アビーム自動車総合研究所
URL：https://www.sc-abeam.com/
お問い合わせフォーム：https://www.sc-abeam.com/contact/